

ろう。そこには法然を伝統するに当つての実践派理論派、進歩保守、新旧兩派の意見の対立が見出される。

その他、天台の住心や長西の如き法然の教を受けたもの、又はその滅後の帰浄者、法相の良遍や東大寺の悟阿等により、主として法然滅后三十年以後のころ、諸行本願義が主張されている時、かの正元元年（一二五九）に著された日蓮の「守護國家論」に於て、選択集を痛烈に破しつつ、法然の門弟で内心は専修念仏でありながら外面のみ諸行往生説を立て聖道門に妥協するように見せかけている者もあり、これ又当時の浄土教界の状況を観察することが出来る。かように法然門下一般を通じて見られる状況は、前述した法然の主張、それに関連して引起されてきた外部的な論難などが顧みられ、更に他力念仏創唱後まもなくと云うことや、教団的拘束力の少い自由教団であつたことや、法然門下各自が天台や真言などを経て帰浄するとか、その経歴を種々にしていたなどのことからの輻湊等が詳細に注目されるならば、その成立の必然性を容易に理解せしめられ得ると思う。かようにして、法然門下は内外諸方面より全体的に、法然の浄

土一宗念仏一行主義確立の為に、念仏諸行問題等を中心に、或は仏教の根本義に顧み、或は浄土正依の三經、或は善導等により、法然の指示を仰ぎつつ各自の浄土教体系を再構成再確立すべく要求せられていたのである。

鎮西上人の嗣法の意義

一

山崎 益身

鎮西上人は、我が浄土宗法然上人の後を受け継いだ浄土宗の才二祖であるにもかかわらず真宗源流史論（中沢見明氏）の中によれば、二祖と云う歴史的な根拠がないと主張している。特に七条起請文に署名がない、又、選択集の附屬の史実が曖昧であり、末代念仏授手印の手次状の史実は無根の虚説であり、従つて師弟關係について尚確実な史料に欠けている。更に年回追善に説経札讀の記事を載せているのは、恐らく未流の将来の經濟問題を

考慮した結果であらうと論じている。史論家の考察に対して、才一章鎮西上人の入門、才二章選撰集の付属、才三章授手印の手次状、才四章二祖としての相伝について述べ、特に宗史的立場を取つたのである。

二

鎮西上人の入門についての伝記は、数多くの著書がある。望西楼了恵上人の撰述にかかる弘安七年（一二八四）鎮西上人入滅後四十七年目に出た聖光上人伝一卷である。その末文に

凡歟生前懿德没後靈瑞或聞忠師之伝説或
依入阿敬蓮社之記録粗記梗概專備報恩而已

とある。了慧上人の師然阿良忠上人の見聞及び鎮西上人門下の敬蓮社入阿入西上人の記録等確實な史料に依つて撰述されてある。又その外に、鎮西上人が法然上人の門下になられた記事が多くある、念仏名義集

此奴三十六ト申セシ年ノ五月ノ比ヨリ法然上人御房ニ
參テ四十三ノ歳ノ七月マテ弁阿ハ八年相副進セテ浄土
ノ法門ヲ奉被教候

とある。又、同じく念仏三心要集と、良忠上人の決答授

手印疑問鈔と、選撰疑問答等の史料によつて鎮西上人の入門は明らかになされるのである。

三

選撰集の付属について史実が曖昧に対しては、鎮西上人自らの徹選撰本願念仏集の上巻の後に書かれてある。

弟子某甲忝奉遇法然上人之在世親習伝称
名念仏之義理專修称名偏期往生之間。……
歡喜余身隨喜留心。伏以難報仰以難謝。非
啻伝義理於口決復被授造書於眼前。解行有
本文義已足。

とあり、この徹撰集によつても、選撰集の付属の重要な意義がわかる。又、選撰疑問答にも同様の記事がある。真宗源流史論には法器たるによつて授与せられたと言つているがそれは良忠上人が、法然上人、鎮西上人の相伝の意図を測られたにすぎない。これは選撰集の製作年代を真宗は元久元年説を立てている上からであらう。浄土宗は建久九年説である。それは近年石井教道博士の選撰集の研究に八説を述べられて建久九年を重要されている点から選撰集の付属を受けられたのである。

授手印の手次状は、血脈が鎮西上人、良忠上人師資合血の授手印血脈で伝々相承するわけであるが、それに秘法手次状が授けられている。これは、即ち念仏往生浄土宗血脈相伝手次の事である。これに対して史論家は、手次状については特に、後白河法皇以下皆以浄土宗修追善まで紙面の大半は、殆んど無用の文字を連ねたものであり、又後白河法皇御臨終の時善知識であつたと云う説は聖光の手次に記載したが初見である。又、法皇御追善に礼讃、浄土三部經を勤修は未従の經濟問題を考慮したと論じている。後白河法皇の御臨終は四十八巻伝に書いてある。又、後白河法皇の浄土信仰についての資料は少くない。玉葉、明月記などによつても明らかに出来る。善知識については三種の善知識が摩訶止観四下に述べられ、一外護、二同行、三教授である。鎮西上人は臨終行儀を重く覲られ浄土宗要集に才七十七往生善知識事を設けてある。礼讃や三部經を經濟問題に結びつける考えは余りにも打算功利的な見解である。これは現代の社会的經濟生活などの問題から割り出していると思う。

鎮西上人の手次状は歴史的な実例を明らかにされたのである。

五

史論家は法然は聖道諸宗から専修念仏の浄土宗を別立せしめたけれども、彼はその滅後に於ける宗門統治者を選定することはなかつたのである。それで若し強いて法然門弟中でその後継者を信空であると述べているが、浄土法門源流章や伝通記縁鈔卷四などによつても明らかである才二祖は鎮西上人である。なにゆえに鎮西上人が法然上人に八年間師事なされた事から考察するならば、鎮西上人がこの浄土宗の正統を継ぎ、徒弟を教養し、鎮西一円を教化なされ、上人の晩年頃になると異義邪説が横行したため、鎮西上人は末代念仏授手印をもつて相伝なされたのである。ここに鎮西上人の嗣法を取り上げた才である。